

# 東京大空襲・戦災誌

## 東京大空襲・戦災誌

### 第2巻

5月25・26日空襲——中野北部

編集 『東京大空襲・戦災誌』編集委員会

刊行 財団法人 東京空襲を記録する会  
理事長 有馬頼義  
東京都新宿区三光町23 浜田ビル内

発行 1975年3月1日



日本閣では……

中央練東中野駅前の日本閣(中野区小滝町一番地)は、昭和一〇年一〇月、それまでの料理屋『鈴木家』を、木造三階建ての結婚式場に衣替えし、一時は社員一六〇名をかかえ、一日四五組の挙式を挙げるほどであった。

昭和二〇年に入ると、中央線沿線の建物強制疎開が急速に進められ、当然日本閣も予定されていた。しかし淀橋区戸山にあった陸軍科学研究所が罹災した場合

### よみうり寸評

ちょうど75年前、1945年5月27日の新聞の題字をよみうりしたら驚くだろう。本紙のほかに朝日、東京、日本産業経済(現日経)、毎日と各紙の名が並んでいる◆八戦災により印刷工程に支障あり、東京五社の共同新聞を発行致します▽。紙面に載った断り書きの戦災とは、前々夜の「山の手大空襲」である。東京の都心などで数千人が犠牲になった◆体験者の手記集『表参道が燃えた日』が刊行されて10年余になる。今は高級ブ

ランド店が集まる街路に炎のアーチができ、遺体が折り重なっていたという◆八表参道の大灯籠の傍らで彼女を待つている若者は、かつて灯籠の白石に焼死した人々の脂が黒く染み付いていたことを知らない▽(米澤蘭子さん)。知らない世代はそれからさらに増えている◆戦後75年はコロナ禍と重なった。戦争に現下の戦いをなぞらえるのが穏当でなくても、こうは言っていないかもしれない。人類が封じらるべき相手という意味で戦争自体は疫病に通じる。真相を知ることが大切なのも同じだろう。

2020. 5.27

軍が接収するというので、強制疎開はまぬがれ、陸軍戦車部隊約四〇〇人が駐屯していた。三月になると一〇日大空襲の下町罹災者も宿泊していた。戦車部隊は、沿線の強制疎開執行を終えると、五月二〇日に去って行った。

五月二十五日、午後一〇時半頃警戒警報、続いて空襲警報発令。すぐ前の自宅にいた鈴木社長は、焼夷弾落下とともに自宅に見切りをつけ、日本閣に避難した。日本閣はまだ樹木は黒々と繁り、三〇〇坪(約九九〇〇平方メートル)の敷地と一〇〇〇坪(約三三〇〇平方メートル)の池があ

った。社員数名と、三月一〇日空襲の罹災者が待機していた。二〇〇畳敷の大広間が直撃を受け、庇から火が吹き出した。五〇〇枚ほどあった羽根ぶとんを、数十枚までは池に投げ込み、残らなかったが、結局水に浮いて全部焼けてしまった。

鈴木社長は、築山の滝壺近くに身をひそめ、金館が火に包まれてゆくのを見た。真赤な「痕」と化した約一〇〇〇本の田柱が林立し、やがてそれも轟音とともに、無数の火の粉を吹き上げ、崩れていった。(鈴木松久(当時日本閣社長)談)